

問1

一見雑然としたものの中からキーになる情報を引き出す作業、自分の持っている知識のうち、どれが今回の問題解決に有効かを見極める作業など、自分が置かれた状況やニーズを的確に把握し自分の頭で考えるという点。(99字)

問2

著者は、「勉強で考える習慣や能力を身につけていない人は仕事もできない」「大学で知識を得て、そしてその知識をベースにして、自分なりの考えを組み立て、表明するという知的トレーニングを積み重ねることで、社会人としての力が磨かれていく」と述べている。

私は著者の意見に勇気づけられる。なぜなら、私自身が間もなく大学で学ぶ立場にあるからだ。私が専門学校ではなく大学への進学を希望しているのは、職場で用いる細かい技術よりも、仕事をする上での基本になる考え方や社会に対する関わり方を学びたいからである。

著者によれば、学問から学ぶべきなのは、「一見雑然としたものの中からキーになる情報を引き出す」「自分の持っている知識のうち、どれが今回の問題解決に有効かを見極める」といった習慣だ。私は、高校時代までは、知識が増えるにしたがって問題の解決法の知識も増えていくと思っていた。しかし、社会人になれば、マニュアル的な解決法では対処しきれないほどの複雑な状況の中で仕事をしなければならないだろう。複雑な情報の中から「キーになる情報」を引き出し、「自分の持っている知識」を応用するトレーニングを大学で積み重ねていきたい。(496字)